

秀 賞

「習字」がくれた力

宮城県栗原市立志波姫中学校

三年 佐々木 舞 緩

息を詰め、真っ白な紙に筆を下ろす。筆先に神経を集中し、力を込めて書く。一筆一筆気を抜かず、筆を運ぶ。何枚も書き続けていると、いつの間にか周りの音も光も消え、私と習字だけの空間になる。その中で、夢中になって筆を滑らせる。こうしていると、自然と心が落ち着いてくる。

始まりは、小学三年生の頃。祖母の勧めで何気なく始めた習字。気づけば、中学三年生になった今も続けている。私に通っている習字教室は、大きな教室ではないのだが、仲の良い同級生やかわいい小学生もいて、私は週に一度、みんなとこの場所に集まって習字をする時間が好きだ。

しかし、思うように良い作品ができず、自信をなくしそうになるときもある。

去年の冬、一年に一度行われる、「宮城県児童生徒書きぞめ展」に挑戦することになった。課題は行書での「理想」。行書ならではの筆脈の柔らかさと、二文字の大きさのバランス、そして間隔。何度も練習し、何回も書いて、それでもなかなか「これぞ」と納得のいく作品ができず苦戦した。自分の実力のなさを痛感させられた気がした。

しかし、このままでは終わりがたくない、という強

い思いが膨らみ、その思いのまま、ありったけの力で、なんとかその時の自分の精いっぱい作品を仕上げることもできた。

だが、応募した作品は、県審査で入賞はしたものの、私が目指していた賞には届かなかった。上には上がいることを実感させられ、悔しかった。私には才能がないのではないかと、習字を続けていく意欲が薄れていくような気がした。それから、習字教室に通うのも、億劫に思えてきた。

しかし、そんな時、家族に、「続けていれば、いつか必ず自分のためになるよ。習字は舞緩の特技だし、個性なんだから。」と、励まされた。そして、一緒に練習している友達も、悩んでいる私に気づき、

「お互いに、後悔しないような作品を仕上げよう。」と力づけてくれたのだ。

その励ましに勇気をもらい、そしてやっぱり私自身も、今まで続けてきた習字を、そして書に向かう時の、あの時間を手放したくなかった。

習字は個人個人、単独で書くものだが、同じ空間に、同じ志をもった仲間がいて、一生懸命に指導してくださる先生がいて、同じ目標に向かって努力する。疲れたり、うまくいかなかったりしても、

「あと少し、頑張ろう。」

そう励まし合いながら、限界まで自分を追い込んでいく。一つの作品をみんなで仕上げているような気が持ちになる。そうして、努力の末に満足のいく作品ができたときの達成感。この小さな幸だが、私が習字を続けていく「ちから」になっているのだと思う。

先日、学校で運動会の団旗を制作することになった。ライトブルーの地にシルバーを基調に虎を描いたデザイン。私は、筆で文字を書く部分を任された。部活の合間に練習し、一週間ほどかけてやっとでき

あがった。クラスのみんなや、縦割りの一、二年生が、「かっこいい!」

「ありがとう!」

と、とても感謝してくれた。私は、自分がみんなの役に立てたことに、喜びと誇りを感じた。そして、私の自信となり、誰かの役に立てることは「習字」なのだと思えることができた。これまで培ってきた技を、これからももっとと磨いて、生かしていきたいと思った。

私は、習字から、大きなことを学んでいるように思う。限界まで諦めない心。より良い作品、より高いものを求めて挑戦する心。そして、最後まで努力することの大切さ。この習字で学んだことは、これからの私の人生にとって、大事な根っこになっているのだと思う。

私は今年、もう一つの目標であった、「生徒・毛筆の部」の最高段位、八段に合格することができた。あの時、みんなの支えがなかったら、くじけて辞めてしまっていたら、ここまでくることはできなかった。この目標達成は、私にとって、とても大きな自信につながった。

今度は、あの大きな目標、去年叶わなかった「宮城県児童生徒書きぞめ展」で、県審査に進み、目標の賞を取ること。今年が最後の挑戦となる、この目標を達成することを目指して、日々精進していきたいと思う。

真っ白な紙に向かう。墨の匂いが胸いっぱい広がる。筆にたっぷり墨を含ませる。さあ、書く。心を通わせ、自分の想いを筆にのせ、力を注ぎ込んで。

作文を書くに当たって

何気なく始めた習字から得たことを作文にしました。うまく書けなくて挫折しそうなときも、励ましてくれる周りの人たち。自分の最大限の力を振りしぼって諦めないで、努力し続ける心。これは習字に限ったことではないと思います。努力した分だけ、いつか自分に返ってくるということを、作文を通して伝えたいです。